

幼稚園・保育所における英語活動の実践（3）

—実践者の保育観に視点をあてて—

秀真一郎（吉備国際大学）田中拓也（東京福祉大学）中島眞吾（名古屋短期大学）

小野克志（名古屋文化学園保育専門学校）木本有香（同朋大学）

横井一之（東海学園大学）志濃原亜美（秋草学園短期大学）

キーワード：英語活動 幼児教育 保育内容 保育者

1. はじめに

幼児教育現場における英語活動の実態について研究を進めてきた。今回は実践者へのインタビューを通して、一事例からくる幼児教育現場における英語活動に着目し、実践背景と実践者の保育観について考察する。

2. 実践者の概要

インタビュー結果

インタビューを実施した結果は以下の通りとなった。

- 子どもに英語を教えるきっかけはなんだったのか
近隣にて英語レッスンを行っていた方の転居によって、レッスンの引き継ぎ要請がきっかけとなった。自宅で小学生へ英語を教えていたことも要因となった。

- 英語活動における意図やねらいは何か

英語に早くから触れることに賛成である。日本語以外の音・リズムを聴き取る耳を育てるほか、日本語以外の言語・文化の理解も大事な要素と捉えている。しかし、知識の詰め込みではなく、楽しく英語を交えて遊ぶことを一番に考えている。

- 保育現場における英語活動をどのように捉えているか

あくまでも保育士と一緒に英語を交えての遊びと考え、新しいことに触れる楽しさを味わう場と捉えている。

- 教材をどう作ったか（今のスタイルをどのように確立したか）

試行錯誤の連続であり、まだ確立したとは思っていない。常に英語活動を片隅に置き、日常生活やインターネット上で目にし、耳にするものを教材や題材に活用できないかと考えている。

- 活動内容や題材を選ぶ上で大事にしているものは何か（題材の選択基準）

日本語との違いとして、英語独特の“月・曜日の表現”は取り入れるが、活動テーマとしては捉えていない。子どもたちが興味を持ち、活発にみんなが参加でき、発話する機会がある様に心がけている。身近な存在で知的好奇心を刺激するものを大切にしている。

- 目指す方向性、望ましい子どもの姿をどのように考えているか

英語活動をきっかけに、外国や異文化への興味を持ち、広い視野とともに成長してほしい。

- 現場の保育者が英語活動を行うことの意味をどのように考えているか

外部教師と担任保育士の連携によって英語活動は問題なく行うことが可能である。

- 今後の保育者にやってもらいたい英語活動の形、望まれる保育者像とはどのようなものか

子どもたちと英語活動を楽しんでほしい。子どもたちを褒め、自信をもたせ、盛りたてていくことで十分。

3. 実践背景と実践者の保育観に対する考察

今回インタビューを行った実践者において注目すべき点は、子どもと英語を結びつけるものを「遊び・経験・きっかけ」としている点だと考える。幼児教育における英語活動を早期教育と捉え、英語の習得を目指すものとは一線を画していると言える。この点に関しては、意図やねらいにおける「他言語・異文化理解」からも読み取ることができる。実践者の願いが「英語活動をとにかく楽しむこと」ということこそ、実践者の保育観の表れだと考える。

4. 今後の課題

幼稚園・保育所における英語活動の実践を研究する中で、一つの方向性を見出したと言える。それは、1. 日本の幼児教育現場における英語活動は、現在展開される保育内容の一部として捉え、日常の保育に根付いたものと捉える必要がある。2. 英語活動を日常保育の一部と捉えることにより、立案・実践者も子ども理解が十分なされている担当保育者である必要がある。

様々な経験をする上で人格形成を行い、生きる力を身につけている子ども達だからこそ、「他言語・異文化理解」は重要な経験となり、その経験を立案・実践する人こそ、子ども理解が十分になされている担当保育者でなければならないと考える。